長崎県教組 障害児教育部 2023 年度 第3回学習会案内

《 やってみよう　インクルーシブ教育 》

『子どもたちはみんな多様ななかで学びあう ～いま求められるインクルーシブ教育～』

「インクルーシブ教育って、何のためにやるの？」
「支援学級在籍のあの子とどう一緒にやっていくの？」
「みんな一緒にってどうするの？」
興味のある人もそうでない人も、まずは知ることから初めてみませんか。
大阪のわくわく育ちあいの会・佐々木サミュエルズ純子さんのお話を聞いて、一緒に考えましょう。

当たり前のことですが、障害のある子もない子も、子どもたちはそれぞれ一人として同じではありません。インクルーシブ教育という言葉が「障害のあるなしに関わらず」という文脈で使われることがとても多くて、本来の「すべての子どもたちを包摂する教育」として語られることがまだ少ないことを残念に思っています。本書に出てくる子どもたちが共にすくすくと育ち、周りの大人が子どもたちからまた学ぶ、そんな関係を皆さんに感じていただけるところがあればとても光栄です。（佐々木サミュエルズ純子）

著書『子どもたちはみんな多様ななかで学びあう』より

日　時　2024 年 2 月 17 日（土） 13:30～16:30　部分参加も OK です。

会場　長崎県教育文化会館（長崎市筑後町 2－1　2 階 ）095－822－5195
＊長崎駅前ローソンから山手へ進む。階段を上ってすぐのアルファステイツマンション 2 階

内　容　受付　13:00～
（1）開会行事　13:30～13:40
（2）講演会　13:40～15:10
演題「子どもたちはみんな多様ななかで学びあう」
講師　佐々木サミュエルズ純子さん（大阪市 わくわく育ちあいの会 ）
（3）座談会　15:20～16:20
講演会の感想を交流したり、現状や悩み、これからについて話しあったりしましょう。
（4）閉会　16:30
＊17:30 よりセントヒル長崎にて、講師を囲んでの交流会を行います。
（交流会参加費 ~~5000 円~~→2000 円。公立学校共済組合の補助 1000 円と障害児教育部より 2000 円の補助あり。）

参加費　障害児教育部が補助しますので、学習会参加費は**無料**です。（お茶とお菓子付き）

問合せ先　障害児教育部　山下 090－6777－2016　inclu2023nagasaki@yahoo.co.jp
または、お知り合いの障害児教育部員へ
・お名前、（教職員・保護者・学生の別）・連絡先（電話かメール）

締め切り　2 月 16 日（金）
＊当日参加も OK ですが、お茶等の準備の為、事前に申し込みがあると助かります。
＊交流会参加予定の方は、公立学校共済組合の HP よりセントヒル長崎の 1000 円補助券をとってご持参ください。
＊ランタンフェスティバル開催中の為、交通混雑が予測されます。時間に余裕を持ってお越しください。

ダウン症児のおかあさんが、競争に疲れた保護者や先生方にお送りする1冊

当たり前のことですが、障害のある子もない子も、子どもたちはそれぞれ一人として同じではありません。インクルーシブ教育という言葉が「障害のあるなしに関わらず」という文脈で使われることがとても多くて、本来の「すべての子どもたちを包摂する教育」として語られることがまだ少ないことを残念に思っています。本書には「くるり子どもたちが自にすくすくと育ち、周りの大人が子どもたちから学ぶ、そんな関係を皆さんに感じていただけるところがあればとても光栄です。」(佐々木サミュエルズ純子)

子どもたちはみんな多様ななかで学びあう
いま求められるインクルーシブ教育

著者　佐々木サミュエルズ 純子
価格　1,980円（本体1,800円+税）
判型　A5変形
頁数　280ページ
発行　株式会社ぎょうせい出版
発刊日　2022年5月9日

本書の概要

第1章　著者、佐々木サミュエルズ純子の手記　息子ジェイミーの小学校入学の苦労と、小学校6年間の成長

対談

1. NHK『テレ/パリパラ』コメンテーター　**荒木重雄**さん
   歩くの国では、インクルーシブ教育が当たり前
2. 東京大学大学院教育学研究科教授　**小国喜弘**さん
   競争をあおる"人材教育"から人格保障教育へ
3. ゆとりある教育を求め全国の教育条件を調べる全国教育委員会　**山崎隆夫**さん
   いまの教育に圧倒的に足りないのは「人」と「お金」
4. 障害NGO 子どもの権利条約総合研究所研究員　**山本恵理**さん
   「子どもの最善の利益」は、子どもの権を認めることから

ご購入は公式サイトをご利用ください。
送料無料　https://community-publishing.net/inclusive/
購入方法は公式サイトでご確認ください。

最初の25ページが試し読みできます！

本書「はじめに」からの抜粋

私たちの息子ジェイミーはダウン症という先天性の特性をもって生まれてきました。生まれてきた生命は命をつなぐことが最優先でしたが、つながれた命を、私を含めた社会がどのように引き受けていくのかを、成長とともに考えるようになりました。大切な子ども、大切な人のために、よりよい社会でありますようにと願い考えることは社会に生きる人たちに共通の気持ちではないでしょうか？

ところが、知的な成長がまわりと比べて大きく遅れているからでしょうか、小学校にあがるときに大きな壁にぶつかりました。自分たちが暮らす地域の学校から入学を断られているのではないかというような対応を受けたのです。私たち夫婦は、誰もが歳を迎えた子どもは、誰もが地域の小学校で学びはじめることを祝福されるものだと信じていました。しかし、現実にはそうではないと強く感じずにいられない数々の出来事に傷つきました。そして息子のような子どもの存在は認められているのだと感じ、大変なショックを受けました。

何で普通に学校に行けないの？　でも、まわりに遠慮かけたくないし……。地域の学校に通い、みんなと一緒に学びたい気持ちと、特別支援学校へ行ったほうが迷惑がかからないんじゃないかと躊躇する気持ちの間で揺れに揺れ、悩みに悩みました。だから、今同じように迷っている保護者の方がいらっしゃれば、その気持ち、とてもよくわかります。

幸いにも、私たちのまわりには、みんなと一緒に普通学級で学ぶことを当たり前に思ってくれる人たちがたくさんいて、背中を押してくれました。「幸いにも」と言ったのは、7年間、普通学級で学んで大正解だったからです。ジェイミーは中学生になった今も、字が書けません。自分の名前を言えるようになったのは小学校6年生の3学期。その後の言葉も現在獲得している最中です。それでも、まわりのいろんな友だちと一緒に学び、一緒に遊ぶことにはなんの問題もなく、スクスク、ノビノビと育ちました。そして、小学校の6年間を通して、私たち家族が抱えた問題は、障害のある子どもたちの問題にとどまらず、どんな子どもたちも巻き込む大きな問題だと気づくようになりました。

著者プロフィール　佐々木サミュエルズ 純子

長野県生まれ。2022年慶應大学卒業。2人の男児の母。夫はニュージーランド人でもあり英国人でもあるが、本人はニュージーランド人だと思っている。1990年代にイギリスの大学に入学し中東諸国は湾岸で就職。その後、各地を転々し現在に落ち着くはずのつもりで生活していたが、遅ればせながら夫にとっての母国である日本に移住。移住して間もなく長男を妊娠・出産。わくわく育ちあいの会代表（日・インクルーシブ教育をすすめる会）、子育てと仕事に奮闘する毎日で時間がないのが悩み。会の定例会や地域の保護者のボランティア活動などで人に会って癒されている。

◀ 左から長男のジェイミー、夫のティーブ、次男のジョシュア。
著者の佐々木サミュエルズ 純子（2020年2月）